

## フロイトと狼男 (2)

村 井 翔

### 3. 原光景とその説得力

さてここで私は、分析の経過に依拠して語ることを放棄せざるをえない箇所到达了。これはまた、読者の信頼が私を見捨てる箇所ではないかと危惧するのではあるが。<sup>(1)</sup>

狼男ことセルゲイ・パンケイエフの狼の夢の元となった体験、彼のいわゆる「幼児期神経症」や、さらには今も続く心的不調の原因でもある幼児期体験、すなわち精神分析の言う原光景 (Urszene) について語り始める際に、フロイトはこのようになかなか意味深長な前置きを置いている。これは、まもなく書かれる『快原理の彼岸』(1920) 第IV節冒頭での「以下は思弁である」<sup>(2)</sup> というマニフェスト (宣言) と同工異曲の言い回し、いわば突撃ラッパである。もはや神話的とも言える精神分析の始まり、アンナ・Oこと本名ベルタ・パッペンハイム嬢の「談話療法」の時代以来、分析医の助力によって患者自身が自らの無意識のなかに抑圧された記憶、トラウマを見つけ出し、病から快復するというのが精神分析の建て前であった。しかし、フロイトは建て前だけでは治療が進まぬことに、とっくに気づいていた。1937年の論文「分析における構築の仕事」では、ついに次のような本音を漏らすに至る。「しばしばわれわれは、患者に抑圧された記憶を想起させることに成功しない。だがそういう場合でも、分析を正確に続ければ、われわれが作り上げた構築物の真実性について患者に強い確信を抱かせることができる。この確信は治療の上では、抑圧された記憶の再想起と同じ効果をもたらすのだ」<sup>(3)</sup>

自然科学でありたい、いかがわしいエセ科学と思われたくない、という科学性へのこだわりも精神分析の創始以来、一貫して続くものだが、それについても「放棄せざるをえない箇所」があるとフロイトは考えていた。実際、狼男論文における原光景の提示は、患者はこのような経緯でこのことを思い出しました、といった「分析の経過」についての説明が一切なく、まるで神のご託宣のように登場しているわけだから、事実上、フロイトの創作だと思われても仕方がない。けれども、前述の通り、フロイトにとってはそれでも構わないのである。すでに1905年の症例ドーラ論文において、彼は「患者の治癒のためには首尾一貫した病歴 (Krankengeschichte 患者のヒ

ストーリー＝歴史・物語) がぜひとも必要だ」と強調していた。なぜなら、ヒステリー患者は「幾つかの個々の時期の生活については十分な、脈絡ある話を医者に伝えることができるかもしれないが、それに続く時期については情報は表面的になり、空所や謎が残される。また別の時期は役に立つ情報が何もないために、全く解明不能な、暗黒の時期となってしまう」からだ。「話の脈絡は、表面的なものですら、たいてい分裂しており、種々の出来事の起こった順序も不正確である。患者は話の最中ですら、繰り返し供述や日付けを訂正し、しばらく迷った後にまた最初の証言に戻ったりする」<sup>(4)</sup>

しかもヒステリー患者、より広く言えば神経症患者にとって、自らの来歴を首尾一貫した物語として語りうる能力の欠損は、彼らの病気そのものと不可分な関係にあった。人が自分は何のような存在であるか言えるのは、自分が時間軸上でどこにいるか分かるから、自分がどこからやって来たか知っているし、それゆえどこへ行くであろうかも、だいたい想定できるからである。19世紀における物語的説明に対する信頼、またその需要は圧倒的に、何であれ歴史はその起源をたどることができるし、たどれなくてはならないという思い込みに基づいていた。通りに出ると馬が噛みついてきそうで怖い、と言って家から出られなくなったハンス君、借りていた借金を返すと、恋人が肛門に生きた鼠を入れる鼠刑という(想像上の)中国の恐ろしい刑罰にあうという不条理な強迫観念から逃れられなくなった鼠男氏、彼らが苦しんでいるのは、本当はなぜ怖いのか、なぜそんな不条理な考えにとりつかれているのか、その起源を述べるができないからである。だからフロイトが述べた通り、神経症患者が、私はこれこれこういう経緯で目下の症状に苦しむようになったのだという病歴＝患者の歴史・物語を語れるようになることは、直ちに症状を消滅させることはできないかもしれないが、症状を消し去れるようになるための、決定的なステップなのである。そして病歴＝患者の歴史・物語とは、しょせん物語なのだから、真実であるにこしたことはないが、必ずしも真実でなくともよいことになる。

いかにも陳腐な架空の例を一つ、述べてみよう。どうしてそういうことをするのか説明できないが、毎日、何度も手を洗わないと気が済まないという清潔強迫にとりつかれた患者がいるとしよう。その患者に精神分析医が次のような物語をする。あなたは子供の頃、母親が殺される場面を見てしまったのだ。それは子供にはあまりにショックが強すぎたので、あなたはその記憶を抑圧し、見たものを忘れてしまった。けれども、あなたの手はその時、母親の体から流れ出た血に触れていた。だからあなたは、なぜだか分からないが、日に何度も手を洗わないといけないという洗浄強迫にとりつかれたのだ。この説明が客観的状況にも符合し、「構築物の真実性について患者に強い確信を抱かせることができる」ならば、患者の症状は消えてゆくであろうし、少なくとも患者はなぜ何度も手を洗うのか分からないという苦しみからは解放されるであろう<sup>(5)</sup>。話を狼男に戻せば、したがって、ここでも問題なのは原光景が真実であるかどうかではなく、真実らしいか、患者にとって説得力があるか、ということになってくる。ともかく離反者アードラー

やユングの挑戦から精神分析を守るためにも、フロイトは突撃ラッパを吹かねばならなかった。もはや後戻りはできない。彼の語る原光景の物語は次の通りだ。

あの夜、無意識的な印象痕跡の混沌のなかから呼び起こされたのは、両親の性交の映像であった。それは観察にとってはきわめて好都合ながら、通常そのものとは言い難い体位で行われたものだった。あの最初の夢は、治療の進む間に無数の変奏と新たな装いのもとで繰り返されたが、それに関して分析は望まれるような解釈を提供することができた。こうして徐々に、この場面に結びつきうるすべての疑問に対して、満足のいく回答を得ることに成功したのである。まず観察時の子供の年齢が明らかになった。約1歳半である。当時、彼はマラリアに罹っており、その発熱の発作は毎日、決まった時間に繰り返されていた。9歳の時以来、彼は午後に始まり、5時に頂点に達する気分の抑鬱を時おり見せており、この症状は分析治療の間もまだ残っていた。繰り返される抑鬱は当時の発熱とだるさの襲来を置き換えたものだった。5時とは、もし両者の時間が重なり合わないのであれば、発熱もしくは性交観察の時間であったのだ。彼はおそらくまさにこの病気のために、両親の部屋で寝かされていたのだろう。発病については、直接に伝えられた患者の話によっても確かめられるが、その時期は夏に設定されるのがふさわしく、そうなればクリスマス生まれの子の年齢は  $n + 1\frac{1}{2}$  と想定される。つまり、彼は両親の部屋に置かれた自分のベッドで寝ていたのだが、午後、たとえば熱が上がったために目覚めた。ひょっとするとその時刻は、後に抑鬱によって特徴づけられる5時だったのではないか。両親も半裸で、午睡のために部屋に戻ってきていたのだとすれば、暑い夏の日という想定に合致する。彼は目覚めると、3回繰り返された後背位性交の目撃者となった。母の性器も、父の男根も見ることができ、出来事とその意味を理解した。<sup>(6)</sup>

どのようにして、この原光景が狼の夢へと変形されたのか、しばらくフロイトの説明に付き合ってみよう。フロイトによれば狼の夢で印象的な夢の幕開き、「突然、窓がひとりでに開きます」とは夢を見た者、狼男がかつて眠りから「突然」目覚めて、目を開け、何かを見たことがあるのを表現しているのだという。夢を見たのは4歳の誕生日頃、つまりクリスマスであるから、パンケイエフ少年はクルミの木（クリスマスツリーでもある）に彼を喜ばせるようなプレゼントがぶらさがっているのを期待しても良かっただろう。しかし、実際にはクルミの木のの上に並んでいたのは、彼をじっと凝視する狼たちだった。フロイトは「夢では狼たちに帰せられている注意深く見ることは、むしろ彼に移されるべきだろう」<sup>(7)</sup>と言う。フロイトが夢の作業（夢の加工）として挙げる置き換えの例だが、こんな解釈が許されるのなら精神分析的解釈とは何でもありではないか、という不満はひとまず抑えて、もう少しフロイトの思考を追ってみよう。フロイトは患者が夢のなかの狼たちに見たもう一つの要因、「完璧な落ち着きと動きのなさ」も反対物へと置き

換えられたものではないかを見る。

さて、夢見る者の強調するもう一つの要因も逆転や反転によって歪められているとしたらどうだろうか。だとすれば、その要因が示すのは動きのなさ（狼たちはじっとそこに座って、彼を見つめ、身じろぎもしない）ではなく、激しい運動でなければならない。つまり彼は突然、目を覚まし、激しい運動の場面を目の当たりにして、注意力を張りつめてそれを凝視したのである。<sup>(8)</sup>

性交の目撃が午後5時であったことは、狼男が語った夢のテキストにおいて狼の数が「六匹か七匹」であったのに対し、彼が後に五匹の狼のいるスケッチを描いて、数を訂正したことによって裏付けられる、とフロイトは言う。フロイト流の夢解釈においては、常に事後的な訂正の方が重く見られるのである。狼たちの白さは両親が「半裸」、白いシャツだけを着ていたことの反映であるとされる。「後背位性交」であったために、目撃者は「母の性器」、要するに母にペニスがないことを確認することができ、かねてナーニヤの言っていた去勢の威嚇が現実味を帯びることになった。狼たちの大きな尻尾は立派な男根と解されるが、祖父の語った仕立屋と狼のおとぎ話では、木の上に逃げた仕立屋を追いかけるために狼たちがピラミッドを作った際、一番下になった狼、つまり後背位性交における母のポジションをとった狼は、仕立屋によって尻尾を抜かれ、いわば去勢された狼であったことと符合する。さらに狼とは父親なので（これはフロイトの解釈にとっては、ほぼ自明の前提）、姉が何度も彼に見せてこわがらせたという『赤ずきん』の挿絵、後ろ足だけで立ち上がって、見る者を威嚇する狼の絵は、後背位性交における父親の姿そのものである。その素地を作ったのは、彼のペニスをもてあそんだ姉であったかもしれぬが、4歳にして既にマゾヒストであった少年は、この夢を見た時、父親＝狼に食べられてしまうという恐怖と同時に、彼の期待していたクリスマスプレゼントのように、父親によって性的にも満足させられたい、かつて見た母のように父に愛されたいというマゾヒスティックかつ同性愛的な欲望を感じたはずだ。この愛憎相半ばするアンビヴァレントな感情は、後にフロイトとの間に転移して、繰り返されることになる。しかし、かつての母のように父に愛されるということは、母のように去勢されることを意味したから、この夢は同時に深刻な去勢不安と抑圧を引き起こし、少年は怖くなって夢から目覚めたのである。

決して支離滅裂ではないし、症例ドーラなどに比べればはるかに筋の通った、良くできた解釈だと思う。しかし繰り返し述べた通り、問題は解釈が正しいかどうかではなく、説得力があるかどうかである。そして患者に対する説得力に限れば、フロイトの治療はまぎれもなく失敗したようだ。幸か不幸か、晩年のパンケイエフに対するインタビューが残ってしまっているからだ。フロイト擁護者たちは、老人になったパンケイエフはボケてしまったか、あるいは性に関わる話を

若い女性の前でするのはやはり恥ずかしいのだと弁解しがちだが、そういう言い方でインタビュー内容を否定するのは難しい。確かに、子供時代はいつも子供部屋で子守り女と一緒に寝ていたので、両親の性交を目撃する機会などなかったと主張する彼に対し、フロイトが書いた特別な機会、マラリアに罹った時のこと（マラリアの話は彼自身がフロイトにしたはず）に話を向けていないインタビューは明らかにアンフェアだ。けれども、それを除けば87歳過ぎのパンケイエフはこの年齢の老人にしては異例なほどの、パラノイアックと言うほかない精細な記憶を保持しているし、ましてフロイトの患者「狼男」であることが、彼の生涯のアイデンティティを支えてきたのだから、その肝心な原光景について本人が忘れてしまっているとは考えられない。3回という性交の回数は患者自身の自発的な証言だとかつてフロイトは断言したが、本人がこの原光景を強く否定しようとしており、これが「構築物の真実性について患者に強い確信を抱かせる」に至っていないのは、明白だ。カーリン・オブホルツァー編のインタビュー『狼男との対話』における彼自身の発言は、次の通りである。

私に関する話では、いったい夢によって何が説明されていたでしょうか？私には何だかわかりませんでした。フロイトは、すべてを夢から導き出した原光景に帰因させています。でも夢の中では原光景は現われていません。彼が例えば、白い狼を寝間着か何か、麻布や洋服だと決めてかかっても、どうもこじつけとしか思えないのです。窓が開いているとか狼が座っているとかいう夢の中の光景から彼の解釈に至るまでは、よくわかりませんがとても長い距離があるように思うのです。あれは多かれ少なかれこじつけです。<sup>(9)</sup>

ここでわれわれの論文も、テーマを次の方向に転じよう。フロイトの描いた原光景の物語はなぜ患者に説得力を持ちえなかったのだろうか。それを知るために本来は必要な、診察室で彼と患者の間に交わされたやりとりについて、もちろんわれわれは何も知る術がない。けれども、狼男論文というテキストの迷走の様なら、われわれでもつぶさに読み取ることができよう。そこから見えてくるのは、決して悪くない物語だった原光景が、論文自体のレトリックのまずさゆえに、われわれに対しても、おそらく著者本人に対しても説得力を失ってゆく様である。まずフロイトは、1歳半の子供が両親の性行為を見て、それが何か理解できるのかという当然起こりうる批判を予期して、解釈学としての精神分析にとってきわめて重要な、事後性（Nachträglichkeit）の概念をここではじめて本格的に導入している。例の原光景についての一節に付けられた原注である。

私が言いたいのは、彼がこれを理解したのは4歳になって夢を見た時であって、観察時ではないということだ。1歳半で彼はこの諸印象を受け取ったが、その後の彼の成長、性的興奮、

性的探求のおかげで、夢を見た時にはそれらの事後的な理解が可能になったのである。<sup>(10)</sup>

今日では事後性は、患者と分析医が心の病気の原因解明に着手する時には、目の前にあるのは記憶痕跡だけで、そこから解明のヒントとなる夢のテキストも、意識下に抑圧された記憶（トラウマ）も時間をさかのぼって事後的に再構成しなければならない、というより広い、より深刻な意味で認識されている。フロイトがいかに19世紀自然科学の実体論思考の枠組みのなかで育った学者だとしても、無意識を実体としてつかまえることができるなどという馬鹿なことを考えたことは一度としてないのである。もう少し先の原注では、フロイトは今日われわれが理解する通りの事後性の意味で、この言葉を定義し直している。

テキストを切り詰めて叙述したために、次のような実際の状況を見落としてはならない。被分析者は25歳過ぎになってから、4歳の時の印象や情動に当時は見出せなかったであろう言葉を与えているのだという状況を。この注意をないがしろにすると、4歳の子供にこんな専門的な判断や学問的な思考ができるなんて滑稽で信じがたい、と容易に思ってしまうことになる。これは単なる事後性の第二の事例なのである。子供は1歳半で印象を受けとるが、まだ十分に反応できない。4歳での印象の再活性化に際して、ようやくそれを理解し心奪われる。20年後、分析のなかではじめて意識的な思考行為をもって、当時彼の心のなかで起こったことを把握するのだ。<sup>(11)</sup>

様々な視覚的表象から狼男問題に迫った『狼の夢を描く Drawing the Dream of the Wolves』(1995)という、確かに労作と言いうる研究書を書いているアメリカ人の研究者、ホイットニー・デイヴィス Whitney Davis は1910年から1914年に及んだフロイトと狼男の第1次分析セッションの間にも事後性が起こっており、それは1歳半から4歳までの間の最初の事後性とパラレルなのだと論じている。1910年、分析を始めた直後に狼の夢が語られたが、夢についての自由連想が述べられた後、その解釈はなかなか進展せず、分析の終結日を設定するというフロイトの強引な手法によって、ようやく1914年になって原光景が構築されたというわけである。このようなフィードバック、解釈学的循環はいつでも見られることで、狼男だけの特異な事例ではないと思うが、とりあえず彼の掲げる図を再録しておこう。

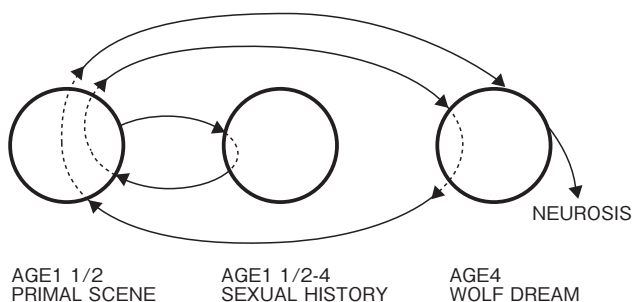


図 1

狼男幼少期における事後性

WhitneyDavis :

*Drawing the Dream of the Wolves.*

(Indiana UP.) 1995, p.35.

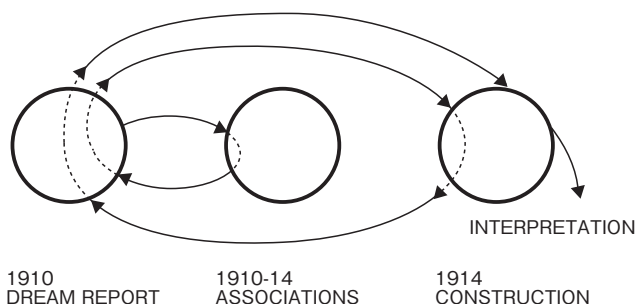


図 2

分析セッションにおける事後性

*Drawing the Dream of the Wolves.*

p.37.

ところで、ミュリエル・ガーディナー編の回想記『狼男自身による狼男』には、次のような興味深い一節があった。

ある時、われわれはコナン・ドイルと彼によって創造された人物シャーロック・ホームズについて語る機会を得た。フロイトはこの種の軽い読み物はそもそも拒絶しているのだろうと私は思っていたが、それゆえ全くそうではないこと、フロイトがこの作家も実に注意深く読んでいたことを知って、私は驚いた。精神分析においても「状況証拠」から幼年時代の物語の再構成をしなければならぬわけだから、フロイトはきっとこの種の文学にも興味を寄せていたのだろう。(12)

フロイトは実際、しばしばシャーロック・ホームズにたとえられる。二人ともコカイン中毒者で深刻なトラウマを抱えており、19世紀合理主義の化身のように見えるが、実はホームズの推理もフロイトの分析もかなり直観的で、非科学的だというネガティブな意味でもそうである。狼男症例の最大の問題は、パンケイエフがフロイトのドッペルゲンガーであり、両者の間に避けがたく転移性恋愛が発生してしまったことだと思う。フロイトは彼のことが何でも直観的に分かってしまうのだが、それだけに直観で分かったことを明晰な論理の言葉で彼に伝えることが、そしてわれわれにも伝えることが一層難しくなったのだ。狼男症例をめぐる諸状況がきわめて錯綜したものであることは、読者の皆さんもすでに察しておられると思うが、小刻みに前進してはまた後

退、さんざん逡巡した後に間違っ、別の方向に一歩を踏み出すといった趣きの、原光景提示後の狼男論文の歩みは、フロイトの知的誠実さのあかしだとしても、読者をいらさらさせるに十分である。次のようにぼやいてみせるシャーロック・ホームズは、「患者の治癒のためには首尾一貫した病歴がぜひとも必要だ」と考えてはいるものの、自らの考えた患者の物語に説得力を見出せずにいる、まさしくフロイトその人と言っても過言ではない。

ワトソン君、この出来事には一体どんな意味があるんだろうねえ。このような苦悩と暴力と恐怖の繰り返しが何の役に立っているのだろうか。何か目的がなければならぬ。さもなければ、この世はただの偶然が支配する場所になってしまうが、そんなことは考えられない。では、どんな目的があるのか？ その問いは永遠につづく大問題で、人間の理性は、いつまでたってもその答えを見いだせないでいるのだ。<sup>(13)</sup>

狼男論文のテキストとしての混迷の様を描き出すことに関しては、イェール学派の重鎮だったピーター・ブルックス Peter Brooks (1938～) がまず1979年に単独論文として発表し、後に彼の著『プロットを（肯定して）読む Reading for the Plot』（1984）の第10章となった「狼男のフィクション、フロイトと語りの理解 Fictions of the Wolf Man: Freud and Narrative Understanding」が今もって最も優れていると思う。そこで、しばらくはブルックスの道具立てをそのまま借りながら、議論を進めよう。ブルックスによれば、狼男論文には次の4種類の素材が要素として混在しているという。「1）幼児期神経症の構造（神経症の物語）、2）過去において神経症の原因となった出来事の順序（神経症の病因論）、3）分析の間に過去の出来事が思い出された順序（治療の物語）、4）症例論文における報告の順序」<sup>(14)</sup>

厳密を期すために、ブルックスにならってロシア・フォルマリストの用語を用いるならば<sup>(15)</sup>、4）がシュジェート (sjuzet)、すなわちテキストの線条的な展開に沿って並べられた出来事の総体（ブルックスがプロットと呼ぶのはこれのこと）であるのは明らかだ。しかし一方、ではこのテキストのファースト (fabula)、実際にテキスト中に導入される仕方、順序とはかかわりなく、事件を首尾一貫した因果的・時間的秩序に従って整序し直したストーリーは何かと問うならば、答えは簡単ではない。狼男論文は1）から3）までのいずれかを交互に、かつ場面によってかなり気紛れに自らのファーストとして採用しているように見える。最終的なファーストが2）、神経症の発生原因を首尾一貫して述べた物語になるべきだと見定めるならば、そのシュジェートは1）、実際に神経症が発現し展開した順序、もしくは3）、治療過程で幼児期の事件が語られた順序であるべきなのだが、実際には4）は1）でも3）でもない。それどころか、分析の間に思い出されるのは、実際に神経症が現われ、展開した順序なのだから、内部構造として1）は現にシュジェートとしての3）のファーストでもありえている。たとえば、狼の夢はこのテキストのなか



でいったい何なのかと考えてみるならば、オリジナルのファーブラ（潜在夢）が夢の作業によって置き換えられ、圧縮された顕在夢だから一つのシュジェートであることは確かだ。けれども、狼の夢はそれについて様々な解釈が行われ、原光景という究極のファーブラが導き出される素材でもある。では原光景と狼の夢との関係は、前者が後者シュジェートのファーブラなのか、それとも逆なのか。答えはホイットニー・デイヴィスの描いた図1に見られる通り、その両方、決定不能だと答えるしかない。

フロイトが論文のいったん完成後、1917年から1918年にかけて付け加えた加筆部分も、もしこれがなければ、論文はより首尾一貫した、説得力のある語り口を保持し得たであろうと言うほかない代物である。まずフロイトは、子供は性交を見て、去勢威嚇は内実のない脅しではないという確信を得たわけだから、彼が見たのは後背位の性交でなければならないとしつつも、実際に観察したのは動物の性交であっても良かったのではないかと譲歩してしまう。フロイトらしからぬことではあるが、1歳半の子供が両親の性行為を見てしまうという原光景はスキャンダラスに過ぎると彼は思ったのだろうか。さんざん迷走した末に、原光景は両親の性交か獣の交接かという、事実としては検証しようもない議論を著者は次のように締めくくってしまう。

私が今やこの病歴の読者からの重大な嫌疑にさらされていることは、私にも分かる。「原光景」をそのように解釈するために、この論拠で十分なのなら、私は最初にかくも不合理に思われる別の見解を示したことに、どうやって申し開きたら良いであろうか。それとも私は、病歴の最初の執筆とこの追補の間に当初の見解の変更を強いるような新たな経験をしたのだとしても、何らかの動機からそれを認めたくなかったのか。申し開きの代わりに、私は一つ別のことを告白しよう。私の意図としては、原光景の現実的価値についての議論を今回は「明白ならず non liquet」ということで収束させたいのである。<sup>(16)</sup>

もう少し進むと、フロイトは「両親の性交の観察、幼児期の誘惑や去勢威嚇といった場面は疑いもなく遺伝的獲得、系統発生的な遺産」<sup>(17)</sup>と、さらにとんでもないことを言い始めてしまう。原光景が人類の祖先から、ずっと遺伝によって伝えられてきた映像だというのでは、まるでユングではないか。アードラー、ユングら離反者から精神分析を守るという論文執筆の当初の意図はどこへ行ったのか。テキストそのものが脱構築的に著者の意図を掘り崩し、追補部分が論文本体の説得力をぶち壊しにしてしまう自己破壊の様を、われわれ後世の読者は啞然として見送るほかない。

分析セッションにおいて思い出されたのが、なるほど最終盤になってからだとしても、原光景と狼の夢の間をつなぐ決定的に重要なエピソードを最後の最後で出すという論文のストラテジーも、はたして正解だったのだろうか。論文はまるで唐突に機械仕掛けの神が現われたかのように、

これでめでたく大団円へと飛び込むのではあるが、これまであちこち振り回された読者としては、こんな隠し玉があるのならもっと早く出してくれ、と怒りたくなるのも人情ではある。次稿で扱うアブラハムとトロークの著書が全く新たな角度から光を当てているという点でも見逃せない、グルーシャのエピソードを最後にご紹介しよう。

狼男は、乳母のナーニヤが来る前にも子守りの若い女中がいて、彼をととても可愛がってくれたことを思い出す。その名は母と同じだったという彼の当初の記憶は、まもなく思い違いとして訂正されるのだが、その後、狼男がこの子守り女の名を思い出すのは、ある迂回路を通してである。これと並行して、彼は子供の頃キアゲハの黄色い縞模様の羽根から強い恐怖を感じたという思い出を語っていた。彼はその蝶がとまって羽根を開いたり閉じたりするのを見て、無気味な印象を受けるが、それは女が脚を開いているようで、女の脚はローマ字のVのようだった。ローマ数字のVは5。5時とは後に彼が抑鬱を感じるようになる時刻、原光景での性交目撃の時刻である。そこから彼は生まれた家にあった果物貯蔵庫のこと、そこにあった大変美味な、皮に黄色の縞がある特定種の梨のことを思い出す。その梨の名はロシア語でグルーシャと言ひ、2歳半の頃、彼の子守り女であった少女も同じ名であった。彼の記憶のなかのグルーシャは床に膝をついてかがみ、尻を突き出した姿勢で床のふき掃除をしていた。

ここからフロイトの解釈は、長い混迷部分の彼と同一人物とは思えぬほどの牙えを取り戻す。グルーシャの姿勢は原光景における母の体位と同じであった。グルーシャと母が同一視され、性的に興奮した狼男は自分を原光景における父の位置に移し入れ、父と同じことをしようとした、とフロイトは言う。すなわち、その場で放尿したのである。なぜなら、2歳半の子にとって、父がしていたことは放尿としか理解できなかったのだから。幼児にとって放尿とは誘惑の試みであり、それに対し少女は去勢の威嚇で応じたのである。こうして原光景と狼の夢との間のリンクが見事に確立されたわけだが、この少女グルーシャの映像は今後、生涯にわたって狼男につきまとい続けることになる。18歳の時、大学生になっていた彼はある農民の娘が池のほとりにひざまずき、洗濯物を洗っているのを見て、発作的に彼女が好きになり、彼女と交わった結果、大人としての彼に再び神経症が現われてくるきっかけとなる淋病をうつされてしまう。あまりにも百姓くさい名前だから恥ずかしくて口にできない、と狼男はこの農家の娘の名を言うことに抵抗したが、その名はマトローナ (Matrona) であった。この名はラテン語のマーテル (mater)、母に由来する。後の彼の妻、看護婦テレゼ・ケラーもグルーシャ、マトローナ系列の女性であることは言うまでもない。最後に再び、昆虫のでてくる夢の話に戻って、この一連のエピソードは円環を閉じることになる。

彼は言った、私はある男がエスぺ (Espe) から羽根をむしり取る夢を見たんです。エスぺ？ と私は尋ねずにいられなかった、それは何のこと？—ええと、それは体に黄色い縞があって、

刺すかもしれない昆虫ですよ。これはグルーシャ、黄色い縞のある梨に対するほのめかしに違いないですね。—あなたが言っているのはヴェスぺ (Wespe スズメバチ) だね、と私は訂正することができた。—ヴェスぺと言うんですか。私は本当にエスぺという名前だと思っていました (彼は他の多くの外国人同様、自分がドイツ語を知らないことを症状行為の隠蔽のために利用していた)。でもエスぺというのは私、S. P. (彼の名前のイニシャル) のことです。エスぺとはもちろん羽根をもがれたヴェスぺである。夢が明確に語っているのは、夢はグルーシャの去勢威嚇に復讐しているということである。<sup>(18)</sup>

フロイトが言っていないことを一つだけ補足すると、羽根W、両側のVをもがれたエスぺことS. P. (セルゲイ・パンケイエフ)、胴体だけになったスズメバチは姉にもてあそばれた彼のペニスの表象でもあろう。この延々と繰り返される反復強迫のなかで、狼男は父であらねばならぬ、能動的な男であらねばならぬというエディプ斯的要請と、母でありたい、女として肛門を愛されたいという欲望の間で引き裂かれている。自分自身がそうであったフロイトにはその状況が痛いほど良く分かるのだが、彼はいまひとつ狼男の「言葉」が捕まえきれなかった。そこでいよいよ、アブラハムとトロークの出番である。

#### 注

(1) Freud VII, S. 156. 全集第14巻、35頁。

フロイトのテキスト引用は Studienausgabe (Fischer Taschenbuch) 1982により、以下の注では巻数のみを示す。訳はすべて私自身によるものだが、読者の便宜を考え、邦訳 (岩波書店『フロイト全集』) の巻数、頁数を併記する。狼男論文の邦訳は須藤訓任訳、全集第14巻である。

(2) Freud III, S. 234. 全集第17巻、75頁。

(3) Freud Ergänzungsband, S. 403. 全集第21巻、353頁。

(4) Freud VI, S. 95. 全集第6巻、15頁。

(5) この「架空の例」は2002年、日本テレビ系でテレビドラマにもなった亜樹直のストーリー、的場健の作画による漫画『サイコドクター』(連載1995年～)で主人公のトラウマとして設定されている物語である。

(6) Freud VII, S. 156f. 全集第14巻、35-36頁。

(7) ebd. S. 154. 全集第14巻、33頁。

(8) ebd. S. 155. 全集第14巻、33頁。

(9) カーリン・オブホルツァー (馬場謙一／高砂美樹訳) 『W氏との対話』(みすず書房) 2001、36頁。

(10) Freud VII, S. 157. 全集第14巻、37頁。

(11) ebd. S. 163. 全集第14巻、45頁。

(12) Muriel Gardiner (Hrsg.): *Der Wolfsmann vom Wolfsmann*. (Fischer Taschenbuch) 1982, S. 182.

(13) コナン・ドイル (伊村元道訳) 『ボール箱事件』(東京図書、シャーロック・ホームズ全集12) 1982、43頁。

(14) Peter Brooks: *Reading for the Plot*. (Knopf) 1984, p. 272.

(15) ボリス・トマシェフスキー (小平武訳) 『テーマ論』(せりか書房、ロシア・フォルマリスト文学論集2) 1982、15頁参照。

(16) Freud VII, S. 176f. 全集第14巻、62頁。

- (17) ebd. S. 210. 全集第14卷、102-103頁。
- (18) ebd. S. 207. 全集第14卷、99-100頁。